

## マリー・ローランサン展 ～東京にお引越し～

ホテル・ニューオータニ・ガーデンコート（東京） 2017. 07. 16～11・12



「マリー・ローランサン」(1883～1956) は、20世紀全半に活躍したフランスの女性画家・彫刻家で、柔らかな色調で女性たちを優美に描いている。

1983年に長野県・蓼科高原に「高野将弘氏」のコレクションをもとに設立された「マリー・ローランサン美術館」は、世界でも唯一のローランサン専門の美術館であったが、2011年に入場者の減少で閉館されて、「パリ・マルモッタン＝モネ美術館」での回復展を経て、今回“東京にお引越し”と題して展覧会が開催される。

展示作品は、画伯の初期から晩年までを年代順の展示方法で、「62点」の油彩作品が紹介されるため、作者の作風の変化を体験することが出来る回顧展である。特に1920年代の作品が素晴らしく、**グレーとパスカルカラーを組み合わせ、夢見るような柔らかな女性像を、恐れずに女性らしさを表現してつづけて**、「アンリー・ルソー」や「ピカソ」らの多くの芸術家と親交をあたためている。



左 《接吻》 1927年頃 油彩・カンヴァス

可愛い少女をモデルに、淡いブルー、ピンク、クレイが奏でる優しいハーモニーで、画伯の芸術が余すところなく表現されている作品である。



右 《三人の若い女》 1953年頃 油彩・カンヴァス

晩年に10年もの歳月をかけて完成した大作で、画伯が愛してきたモチーフや色彩を満たしながら、立体感のある人物を深く大きな構図に配している。